



スタンダードの女子教育論：  
ボーヴォワールの評価を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩本, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004891">https://doi.org/10.24729/00004891</a>

## スタンダールの女子教育論 —ポーヴォワールの評価を通して—

岩本 和子

『赤と黒』『パルムの僧院』などの小説作品で知られるスタンダール Stendhal (1783-1842) は、その文体や登場人物たちの時代を先取りするような特異さもあって、生前はあまり読まれずに死後50年もたってから名を挙げはじめた作家である。ジュリアンやファブリスら主人公たちの存在感の強さは言うまでもないが、主な女性登場人物たち—主人公の恋人たち—も魅力的であると同時に、実は当時の社会的規範から逸脱した果敢な精神や行動力を備えていることに注意を向けたい。

フランスの代表的なフェミニズム論者であるシモーヌ・ド・ポーヴォワール Simone de Beauvoir は、スタンダールの描く理想の女性像を通して、この19世紀前半の作家を「現代の」フェミニズムの先駆者として大いに讃えた。また初期の著作『恋愛論』と特にその中の「女子教育論」を評価し、自身の主張との共通点を見出している。ポーヴォワールが注目したスタンダールの女性観や女子教育論は、確かに私たちの現代に向かって方向づけられた、斬新なものだった。さらに『恋愛論』で展開された考察は、スタンダールの卓越した知識や思索の成果であることはもちろんだが、実は青年時代に妹ポーリーヌへ書き送った膨大な書簡の中ですでに練られていたと考えられる。それは現実の妹を通して女性観や女性の生き方を経験的に学びとり、自分なりの女子教育論の実践の試みを伴うものでもあった。

本稿では、まずポーヴォワールによるスタンダール評価の在りどころを見極めることから出発し、『恋愛論』における女性観や女子教育論を確認した上で、ポーリーヌへの手紙を資料として彼の思想の源泉や実践の試みを具体的に見ていきたい。またのちの小説における女性登場人物たちへの反映とその特徴も明らかにする。最後に、現代のフェミニズム論者やスタンダール研究者たちによる新たな論考も紹介し、スタンダールの女子教育論の意義や限界なども確認しておきたい。

## 1 ボーヴォワールの評価

ボーヴォワールのスタンダール論は、『第二の性』*Le Deuxième sexe* (1949)の原書では第1巻「理論篇」中の一節が充てられていた。邦訳では『第二の性』第V巻：「文学に現れた女」<sup>1)</sup>の中の第2章-5〈スタンダールあるいは真実のロマネスク〉の節にあたる。ここでボーヴォワールはスタンダールの諸小説に現れた女性観を評価しているのだが、とりわけ『恋愛論』第54章「女子教育について」の考察に共感している。つまり、女性も男性と同じ教育を受けるべきであること、女性の自由・解放の必要性を説いていることなどに注目してスタンダールを彼女の考える「フェミニスト」の先駆者と見なしているのである。以下、ボーヴォワールからの引用で、その部分のテキストを確認しておこう。

女にとって最悪のハンディキャップは教育の道がふさがれるということだ。圧迫者はいつも非圧迫者をつまらぬものにしておこうと努力する。男が女に機会をあてまいとするのは故意にである。(……) 女にも男の子がうけるとまったく同程度の知育がなされなければならぬ。反女性主義者たちは、教育をうけた賢い女はできそこないだと主張する。そういう非難のもとには、教育のある女がまだ例外的だということからくる。もし女がみな男と同じように自然に教養をえられるようになれば、女だって男と同じような素直さでそれを身につけられるのだ。まず女を不具にしておいて、自然に反したおきてでしばろうとする。意思に反して結婚させておいて、女にはあくまで貞潔にしろといい、離婚さえ不行跡のようにとがめる。働きのほかに幸福はないのに、女の大部分は無為の生活をさせられる。こういう女の生活条件がスタンダールに憤りを感じさせ、そこに女に非難せられるすべての短所の原因を見ぬくのである。(ボーヴォワール 1949=1959 : pp. 170-171)

また、小説のヒロインたちが「自由で真実な存在」としてロマネスクの魅力を発揮しているというこの論考の中心テーマとともに、スタンダール＝フェミニスト説を主張するのである。

スタンダールがあのように深くロマネスクであり、同時にはっきりとフェミニストであったことは注目すべきである。普通はフェミニストはあらゆることに普遍性の立場をとる合理的な精神だ。スタンダールが女性の解放を要求するのは、一般的な自由のためばかりでなく、個人的幸福の名においてなのである。彼は考える、女を解放しても恋愛はそのために少しも失うことはあるまい。かえって、女が男の対等者になることでよりよく男を理解できるだろうから愛はいっそう真実となる。おそらく、女にみとめられている若干の性質は消失するだろう。しかし、そういう性質の値打はそこにあらわれている自由からきている。この自由はまた別のかたちで示されるだろう。そしてロマネスクはけっして世界から消えてはしまわぬだろう。異なった状況におかれた別々の二つの存在が、自由のうちに対立しあい、たがいに他を通じて実存の意義をもとめつつ、つねに危機と約束に満ちた冒険を生きて行くであろう。スタンダールは真理に信頼をおいている。(ボーヴォワール 1949=1959 : p. 183)

スタンダールにおいては、男性主人公たちがつねに女性を通して人生修行をし自己を知る傾向があることも、ボーヴォワールは読み取っている。『第二の性』第V巻で採り上げられた作家は他にモンテルラン、ローレンス、クローデル、ブルトンらがいる。しかし彼女がスタンダールに最も共感を覚えているのは明らかである。邦訳解説において生島氏はスタンダールの女性観はボーヴォワールの思想の根幹そのものとさえ著しく共通点を持つと指摘した。『『恋愛論』の「女の教育」の章に述べられてある意見や主張はほとんどボーヴォワール女史が第一巻以来各処に説いてきたところと符合するようにさえ私は感じている』(ボーヴォワール 1949=1959:生島〈解説〉 p. 207)。

このように、スタンダールの女性観や女子教育論は、20世紀の第二次大戦後になってようやく前面に出てきたフェミニズムの議論と直接つながる斬新なものだったのである。次にその思想を『恋愛論』から具体的に抽出してみよう。

## 2 スタンダール『恋愛論』の「女子教育論」

スタンダール(図1)の『恋愛論』*De l'Amour*<sup>2)</sup>は1822年にパリのモンジー書店から出版された。2冊本千部印刷で、この時の著者名は「イタリア絵画史とハイドン、モーツァルト、メタスタジオ伝の著者」だった。タイトルに惹かれて手にとっても内容は含みが多くてとらえどころがなく、そのせいか当時は全く売れずに10年間でやっと17冊だったとも言われる。今では古典的著作となり、その中で提唱された「結晶作用」や恋愛の4分類、また恋の発生までの7段階などは出典を知らなくても人口に膾炙する概念となっている。



図1 1835年(52歳)頃、イタリア領事制服姿のスタンダール(Silvestro Vareli画)

改めてこの本を繙くと、第1章冒頭からいきなり「恋愛には4種ある」と始まり、その分類の説明が続く。つまり情熱恋愛(ポルトガル尼僧の恋、エロイズのアベラルに対する恋)、趣味恋愛(1760年ころイタリアで支配的だった恋)、肉体的恋愛(猟に行つて森に逃げこむ美しい新鮮な百姓娘を見かけること)、そして虚栄恋愛(フランスのブルジョワ青年の贅沢)と定義される。続いて第2章「恋の発生について」では、やはり唐突に

「心の中では次のことが起こる」と断定し、「1. 感嘆」から始まり、希望、恋の誕生、結晶作用、次に疑惑を経て、「第二の結晶作用」が起こると明晰に説く。ザルツブルクの塩坑で小枝がやがてダイヤモンドの煌めきを持つ塩をまとうという、いわゆる「あばたもえくぼ」にあたる美しいイメージで、結晶作用の比喩を流布させたのである。

このように、よく知られた概念は冒頭部でほぼ出揃い、おそらくフランス人でも、また何種も邦訳は出ている日本でも、その続きを読み通した人は少ないだろう。謎めいた、時に退屈なテキストとなっている原因は、『恋愛論』がもともとスタンダールのイタリアでの恋人（片思い）メチルドへの失恋を契機に書かれたことにある。想いを断ち切れずに自殺まで考え、自分の過去の振る舞いの誤解を解こうとメチルドに弁明の手紙を書こうとし、やがてその無意味さに気づく。そして宛名のない、実体験に基づいた恋愛の諸側面の考察と分析のエッセーが綴られた。その結果、当時流行しスタンダール自身も影響を受けたイデオロジー（観念論哲学）の方法論を取り入れて恋愛を科学的に分析し、明晰で論理的な分類がある一方で、当事者にしかわからない固有名やエピソード、偽名や含みのある表現で読者を困惑させてしまうのである。

ただ、先に紹介した冒頭部を見るだけでも、ここにスタンダールの先駆的な中心的思想が現れているとわかる。例えば、時代や場所、階級や環境によって人々の気質も恋愛の形も変わることに、ルネサンス期に古代ローマ・ギリシャの芸術が手本とされたような「絶対美」「理想美」は万人のものではなく、主観によって（特に恋した場合）美の基準は変わるものだ、などという考えである。『恋愛論』を読み進めれば、「恋愛からみた諸国民」の章もあり、イデオロジーを介してモンテスキューやエルヴェシウスらの相対主義的文化論から直結する先駆的考察が展開される。

さて、このような特色ある著作において、スタンダールは第54章で「女子教育論」を扱い、ここでもきわめて先駆的な自説を述べるのである。第55章「女子教育に対する抗議」と合わせて、これら二つの章はところどころイギリスの雑誌『エディンバラ・レビュー』*Edinburgh Review* 1810年1月号所収の、シドニー・スミス Sidney Smith の論文を剽窃（翻訳）した

ものだとの指摘もある<sup>3)</sup>。しかし、フランスでは1830年の7月王政以降にやっと眼を向けられ始めることになる女子教育論を、はるかに先取りした文章であることは少なくとも認められよう。

それでは、特にボーヴォワールとの共通性に注目しつつ、テキストを読んでみよう。

偶然とばかげた自尊心の結果である現代の女子教育の現状のおかげで、少女自身の幸福にとっても、我々の幸福にとっても、最も輝かしく豊かなるべき能力を、彼女たちのうちに眠ったままにしている。(スタンダール/大岡訳 1822=1970 : p. 211)

「現代の女子教育の現状」とはどのようなものだったのだろうか。19世紀初頭の女子教育はもちろん義務教育ではない(男子も含めて)。またここで注意しておきたいのは、「教育」と訳されるフランス語には<éducation>と<instruction>があり、前者は礼儀作法や仕付けを含めた教養教育といったもの、後者はいわゆる知的教育で専門的学問知識を修めることまで含む。フランスの19世紀を通して、女子に対するinstructionは存在せず、従って、「男子教育 instruction des garçons」に対して、「女子教育」には「éducation des filles」という表現しかあり得ないという<sup>4)</sup>。『恋愛論』の第54章のタイトルも正確には「女性の教育についてDe l'éducation des femmes」である。その<éducation>もかなり低いレベルのもので、基本的に母親が家庭内で行うか、修道院で修道女たちが行うかであった。ちなみにジャンリス夫人はルソーからの感化もあって、すでに18世紀末に、高位貴族としては例外的に自分の子供たちを自らの手で育て教育したのだが、それでも『修道院論』において修道院保存を強く擁護している。大革命はキリスト教の排斥に伴い修道院を閉鎖し、女子教育にも変化をもたらす契機となった。革命期には多くの非宗教的教育機関や施設ができ、やがて修道院教育の復活とともに多様な教育形態が並立することになる。金持ちの子女は修道院住込みの寄宿生が多く、他に通いの生徒、また非宗教的学校での寄宿生と通学生、あるいは個人指導などがあった。しかしそれら

の「教育 *éducation*」の内容に関しては、19世紀前半も18世紀のアンシャン・レージュム期と変わらず、趣味としての芸術、ダンス、ピアノ、デッサン、絵、針仕事に、ごく基本的な読み書きやフランス文学の教養のみだった<sup>5)</sup>。

このような時代にあって、スタンダールは女性にも教育が必要だと断言したのである。しかもそれは男性と全く同じ内容、同じレベルのものであり、いわば（語彙矛盾であるとされていた）*Instruction des femmes*の提言であったと言えよう。女性の高い教養は社会制度の秩序を乱したり男性の反撥を買うべきものでもなく、かえって愛の幸福と喜びを増すものとなる、と次のように主張するのである。

教養ある女性が、女性化した男たちに加わって社交界の楽しみや会話にふけるかわりに、女らしい優しさを失わないまま、思想を持っているなら、彼女は確かにその世紀の最もすぐれた男たちから、熱狂に近い尊敬を得ることができよう。

女は男の競争者となり、伴侶ではなくなるだろう—そのとおりだ。ただし諸君が禁止令によって恋愛を消滅させた場合に限る。この美しい法律ができるまでは、恋の魅惑と喜びはますます大きくなることになる。それだけのことである。結晶作用の成立する地盤は拡大されるだろう。男は愛する女のそばで、あらゆる思想を楽しむだろう。二人の眼に、自然はまったく清新な魅力を帯びるだろう。そして思想はいつも性格のニュアンスを反映するものだから、二人はさらによく理解し合い、無分別なことはしなくなるだろう。恋はより盲目的でなくなり、その不幸も減るだろう。（スタンダール 1822=1970 : p. 21）

次のように具体的な教育方法の提言もあるが、画期的な「相互教育」も取り入れたもので、それを男女を問わずに勧めている。中央学校とは、革命下の国民公会がフランス各県に設立したもので、グルノーブルでも1796年に創立され、アンリ（スタンダールの本名）少年も開校と同時に入学し、1799年まで共和主義的で自由な教育を受けている。

要するに、教師以外は男子禁制の修道院中央学校を設け、相互教育によって娘に読み書き算数を教えるのがいい。子供を集めることの大きな利益は、たとえ教



師の教えることが限られていようと、子供は知らず知らずのうちに、級友から社会に生き利害に対処する方法をおぼえることである。(……)

もちろん数年たらずで相互教育は、あらゆる課程に適用されるだろう。しかし少女たちの現状から見ると、彼女らは男の子のようにラテン語を習うのがいいと思う。ラテン語は退屈を教える点、なかなかよろしい。ラテン語と同時に、歴史、数学、食用薬用植物の知識、それから論理学と精神科学など。ダンス、音楽、絵画は5歳から教える。

16歳になれば娘は夫を見つけることを考えねばならない。そして恋愛、結婚、男の不幸について母親から正しい観念を教わるべきである。(スタンダール 1822=1970 : p. 228)

終わりの2行に書かれているように、女性にとっての結婚は決して否定せず、また母親によって正しく導かれるべきものだという時代の常識や制約は逃れていないことがわかるだろう。ただ、スタンダールがさらに主張するのは、愛の歓びや結婚生活の幸福のためにも、女性の自立心を尊重し、社会が結婚の自由と離婚の許可を与えることだった。

愛のない結婚における女の貞操は、おそらく自然に反したものである。(……)

しかし若い娘はよろこんで結婚するではないか—それは現代の窮屈な教育制度にあっては、母親の家で忍ばねばならぬ奴隷状態が退屈でたまらないからである。また彼女たちには理性がない。それからとにかくこれが自然の要求だからだ。結婚した女にもうすこし貞操を守らせる方法は一つしかない。すなわち未婚の娘には自由を与え、夫婦に離婚を許すことである。

女はその最初の結婚において青春の最も美しい日を失う。そして離婚によってばか者にかれこれいわれる種を与える。(スタンダール 1822=1970 : pp. 230-231)

フェミニズムの先駆者とされるポーヴォワールが、さらにその先駆者と見なしたスタンダールの女子教育論は以上のようなもので、ごく簡単に概観しただけでも、現代的観点を持つ斬新なものだったことがわかるだろう。本来失恋の痛手から生まれたテキストだが、女性嫌悪や女性批判に陥るこ

となく、徹底的に女性を理解しようとし、男性の幸福のためには資質ある女性の存在が不可欠であることを切実に訴えているのである。このような感覚は、さらに遡って青年時代の妹ポーリーヌへの愛情と彼女への教育の試みで培われた、アンリ自身の実体験と深い思索とに支えられていると考える。次章ではポーリーヌへの手紙からその実践の跡をたどっておきたい。

### 3 ポーリーヌへの手紙

19世紀の文学青年の例に漏れず、スタンダールことアンリ・ベール Henri Beyle（この章では作家以前の人物として、本名アンリを用いることにする）は、知人たちに多くの手紙を書き送った。それらは、しばらく務めたナポレオン軍の官吏として関わった膨大な公文書も合わせて、現在、書簡集として出版され貴重な資料になっている<sup>6)</sup>。

1783年、地方都市グルノーブルで上流ブルジョワ家庭に生まれたアンリは、1799年にパリに出る（図2）。故郷の中央学校の数学で優秀賞をとり、ナポレオンによって設立されたパリの理工系エリート養成校である理工科学校への入学資格を得たからである。しかし文学にもめり込んで、将来大劇作家になって女優を囲う、という夢を抱くアンリは、憧れていたパリへの失望もあって、しばらく病気になる。理工科学校へは結局入学せず、パリの親戚でナポレオン軍の上級官吏として活躍していたピエール・ダリュの世話で軍官職に就く。やがて遠征に従軍し、イタリアやドイツ、オーストリア、果てはモスクワまで、ヨーロッパ中を駆



図2 1802年（19歳）頃のスタンダール（作者不詳）

け巡ることになる。パリに出たアンリは、まず故郷にいる3つ年下の妹ポーリーヌ Pauline (図3) に手紙を送り始め、自分の生活、パリや各地の見聞、読書や演劇・オペラ・コンサートなどの内容などを詳しく書き綴ることになる。もちろん故郷の他の知人や少しずつ増えていく交遊関係で他にも多くの書簡を残しているが、ポーリーヌとの文通はほぼ1815年まで続く。

文通相手としてポーリーヌは、アンリにとってどのような意味を持ちどのような役割を果たしたのだろうか。まず、ポーリーヌは、家族の中でも最も気の合う好きな相手だった

ことははっきりしている。実はアンリにはポーリーヌよりさらに3つ年下の妹ゼナイードがいたが、父シェリュバンとともに家族の中では「敵」とみなし生涯打ち解けなかったようである。母方の祖父で医師のアンリ・ガニョンは尊敬していたが、必要に迫られたときだけ手紙を書いている。手紙の中で、ポーリーヌは最も気おけない家族、妹であると同時に、またアンリが7歳の時に亡くなった母親代わりの役も与えられているように見える。また愛する女性として恋人代わりにもなっているようだ。兄はポーリーヌをいっそう理想的な女性にすべく、多くの助言を行う。保護者のように助言する一方で、同時に日常品のあれこれの送付を頼んだり（むしろ指示したり命令したり）、父からの送金も妹を介して要求する。さらに、従順な良き生徒として、自分の読書体験や演劇、音楽、哲学などを語る相手にする。手紙自体が正しい文体や綴り字の練習材料にもなり、アンリは妹が書くべき手紙を添削してやると言う。そして彼の手紙の中では、自身の教育理念や女性の生き方も語られるのである。根幹としては女性も男性



図3 1806年(20歳)頃の  
ポーリーヌ・ベール  
(作者不詳)

と同等に論理的思考ができ、強固な心と偉大な精神、優れた知性を持たねばならないという考えがそこにはある。

矢継ぎ早に手紙を送り、毎回のよう「返事を書け」と繰り返す兄に対し、しかしポーリーヌはあまり筆まめではなかったようである。紛失したものもあるが（これは兄アンリに責任があろう。ポーリーヌの方は兄の手紙をほぼ残していたようである）、現存するのは9通のみである。思い通りには反応してくれない妹への苛立ちが行間から読み取れるが、しかし結果的に、アンリは一方的に書くことでむしろ思想形成を効果的に成し得たとも言えるのではないか。つまり、彼が紙の上で話しかける相手は、理想のポーリーヌ、理想の読み手、理想の女性であり、また同時に自分自身の思考を分かち合う一種の分身alter egoでもあった。この理想の相手との仮想の対話により、彼は問いを発しては自分でそれに答え、女性の心情や生き方について質問しつつ自分の想像でそれに答える。またアンリの望む女子教育をポーリーヌに直接施そうとしつつ、それが次第に女性の生き方についての思想として形成されていく。つまり、現実のケースについての試行錯誤が、女性一般についての考察ともなったのである。のちのスタンダールにおいて、その先駆的な女性像がきわめて具体的で明確なイメージを伴う理由の一つがここにあるのではないか。また第三者の眼も意識しつつ客観性や多様な視点を取り入れながら、反論されることもなく考察を積み重ねていったと考えられる。さらに私たちに残された彼の書簡テキストは、その思想形成の源泉と足跡を明らかにしてくれる未来の作家の貴重な資料にもなったのである。

それでは、女子教育論のテーマに関連する箇所をいくつか引用していこう<sup>7)</sup>。

ピアノは進んでるかい？ ニさんたちの勉強はどうだい？ 数学も少し勉強させてもらえるようにしなさい。数学ほど大事なものはない。(……) 十カ月後には40フランほどの出費で、たいていの男たちよりも優れた論理的思考を身につけていることだろう。どう思うかい？ いいと思うならばくからパパに言ってあげよ。それとも自分で頼むかな。おまえのニさんたちに40年教わるよりも、50

足の靴下よりも、価値があるよ。いずれ家庭の良き母親になる女の子は、靴下の作り方は知っておくべきだが、とくに青春の貴重な時期にはぜったい針にさわっちゃいけない。知識を身につけられるのはせいぜい20歳までだ。[1800年4月20日付] (岩本 2008 : pp. 27-28)

文法はあまり進んでいないそうじゃないか。まあ、そうだろうな。いちばん退屈で、だからこそいちばん難しい学問の一つなんだから。それを究めるにはどうしてもいくつかの言語の文法を比較しないといけないし、そのためには外国語を一つ学ばなくちゃならない。なんとかやりくりして、共和暦9年[今年]の終わりの数ヶ月は一つ、たとえばイタリア語を習えたらいいな。当然必要性を感じるべきものの一つ、それは歴史の勉強だ。会話の基礎になるし、判断力を養うのにこれ以上のものはない。ペン習字とはまったく違う意味で必要なデッサンも習ってほしいなあ。達筆になるにはたくさん書くしかないとはよく言ったもので、おまえが事務員のように書く必要もぜったいにならないだろうから。だから来年はデッサンと歴史と、それにこれも欠かせない算術を習ったらどうかな。年初めの数ヶ月を算術に充ててから、収穫月初めころにイタリア語の勉強に切り替えたらいい。[1800年9月28日付] (岩本 2008 : p. 48)

ポーリーヌは11歳から修道女のもとで、きわめて伝統的な教育を受けていた。母親がいないのだから、ブルジョワ家庭の少女としてはごく普通の方法だったはずである。そこでは宗教、文法、音楽、作法、若干の文学を身につけるというもので、アンリはその実態をまのあたりにしていたことであろう。3年後、1800年秋から14歳のポーリーヌは、新しい教育を受けることになる。グルノーブルのサン＝ピエール・マリア女子寄宿学校でラセーニュ嬢 Mlle La Saigne<sup>8)</sup> による高度な教育を授かるのである。この寄宿学校は、社交界の令嬢を育てると同時にいくらかの知識も習得させ、それまでの礼儀作法はダンスに取って代わり、さらに数学や少しだがラテン語、イタリア語も学べた。故郷を離れて約1年のアンリは、この新しい教育に大満足だと書き送っている。その教育効果のほどははっきりとはわからないが、革命期の新しい雰囲気の中で、かなり自由に女友達との学校

生活を楽しんだと思われる。その証拠に、自宅に戻ってからは心身ともに健康を害しがちだったようで、環境改善のために自宅の引っ越しがあったり、憂鬱な気分には捕らわれたりもしている。叙情詩やロマン主義的小説なども部屋や山中に籠って読んでみてはメランコリックな手紙を兄に送ったりもする。明らかにその兄の影響と思われるが、妹ゼナイードを初め、父や祖父、祖母たちを俗物と見て、人間嫌いになり、ある時に近郊の村へ家出を試みたこともほのめかされている。

このように良くも悪くも兄の教育実践の効果の片鱗を見せるポーリーヌだった。しかし、彼女が当時の女性としての規範を逸脱する突飛な行動に実際に走ったとき、アンリはきっぱりと、男女の社会的相違を説き、その行動を非難し、たしなめることになる。例えば1805年、近郊のヴォレップへの家出騒ぎを起こすポーリーヌに、兄が慌てて書いたのは次のような手紙だった。

おまえの手紙には言葉も出ないほど驚いた。狂気の沙汰だよ。考えてもみろ、お父さんに内緒でヴォレップへ行ったら、おまえが社交界で得られるはずの地位を永久に損なって、墮落した娘の仲間入りをすることになるんだぞ。(……) これはほんとうのことだよ、いったい誰が、たとえ恋していたって、両親の家から飛び出すような娘と結婚したがるだろう？ ほくは今まで会った誰よりも偏見のない男だが、ほくだってぜったいにそれはしたくないな。愛しているなら、そんな娘をめった打ちにして放り出してしまうだろうね。(……) だから慎重に行動するように。おまえは幸福のすぐそばにいるんだよ、少しの辛抱だ。いったん結婚してしまえば、あとはおまえはただ幸せになるだけだ。少し、いやもっといいのは、かなり抜け目なくやれば、夫をいいなりにできるだろう。滑稽になるのを恐れる社交界の男でありさえすればね。もし知ったかぶりの男なら(つべこべ言う男のような)、おまえを田舎へ連れて行って監禁し、殴ったりいろいろするだろう。だから社交界の男と一緒にするのはどんなに大事なことが。しかもそれがパリへ来る唯一の方法なんだ。[1804年8月29日付](岩本 2008 : pp. 72-74)

アンリはまた、女性にとっての結婚の必要性は決して否定しない。結婚

は愛がなくてもよく、それが女性の自立や幸せの手段になると主張する。この点で、彼も当時の伝統的結婚制度の枠内に完全に捕らわれているとも見える。しかしのちの『恋愛論』で書かれるように、本当は、女性にとっての結婚の自由と離婚の可能性を求めていたはずである。現実の妹を前にして、乗り越えられない社会的制約と時代の限界をも同時に認識した上で、「今」可能な限りでの幸福を求めよと説得しているのだと思われる。

だから、御し易いお人好しの夫にこそ、幸せを求めべきだと思う。(……)  
この御し易い夫のおかげで愛する子供たちの母になれる。そうすれば人生は、物理的に不可能な小説じみた情動ではなく（長時間同程度に緊張し続けることはできないという諸神経の性質によれば、だ。それにどんな印象も繰り返されると、より安易に、より感じにくくなるのだから）、分別ある満足感に満たされるんだ。(……) 結果として

- 1 結婚しなければならない
- 2 善良でかなり金持ちの男と。

[1807年3月24日付] (岩本 2008 : p. 126)

ポーリーヌはまた、1807年ころ、親しい女友達と男装でグルノーブルの夜の街を走り回ったり、男まさりの行動をとることが多かったらしい。その噂を聞きつけたアンリは、またそれをたしなめる手紙も書いている。

女の身体に宿った気まぐれが高貴な人間にとってはそんなにも致命的になるのは、ともかくそういった気まぐれが、ふつうは見下げはてた弱さに起因すると考えられてしまうからだ。どんなに知的でどんなに惚れてくれている青年でも、おまえが男の服を着て夜に街中を走り回っていたと2、30人の婦人が断言したら、結婚などしてくれないよ。(……)

〈だって退屈でたまらないんだもの！ こんな単調な生活を続けるのはもういや！〉

でもね、いちど噂がばっとたったらそれが永久に続くんだよ。もう二度と夫を見つけれなくなるんだよ。(……) 〈わたしは英語か絵か何かの先生になるわ

よ。)

おまえはこの仕事で生活費が稼げると思っているだろう。そして、この方法で稼いだ4000フランで、釜糸の靴下の商売から上がる4000フランで暮らすお隣のブルジョワと同じように幸せになれると思っているだろう。とんでもない。靴下職人はおまえを軽蔑して、それをあの手この手で思い知らせてくるだろう。

(……) 女性はまず結婚しなくちゃならない。求められるのはそれだ。そのあとで好きなことをするんだ。[1807年11月27日付] (岩本 2008 : pp. 130-131)

手紙というテキスト上では斬新な理想の女性像や教育観を練り上げるが、現実には女性に対する社会的制約の強さを認識していたアンリの態度がよくわかる。しかし、のちに作家としてのスタンダールは、強さと知性、自由と自立心を、フィクションの世界の中で、つまり小説のヒロインたちには無限に許し、彼の求める理想の女性をその中で生きさせることになる。

#### 4 小説（創造的テキスト）への反映

現実のポーリーヌへの次第に大きくなる幻滅、各々の生活の変化（ポーリーヌの結婚、夫の死去、親族との遺産を巡る確執、アンリの各地への遠征・駐屯、モスクワ敗退、ナポレオン帝国崩壊と軍職の失業、など）もあって、兄妹の文通は次第に稀になり、1815年の暮れをもってほぼ完全に途絶える。これはまた、アンリが新天地を求めてイタリアはミラノへ移り、愛と芸術にのめり込み、文章を書く生活が中心となり、作家への道を歩み始める転機でもあった。思想形成や文学修行に大変重要な役割を果たしたポーリーヌへの手紙は、実はそれ自身がアンリの理想とする「別の」生や様々な「恋愛物語」を展開させる一種の創作テキストでもあった。まさにそれにとって代わるように、この時に第二の道が始まるのである。音楽論、絵画論、ロマン主義宣言としても有名な『ラシーヌとシェイクスピア』、評伝、そして『恋愛論』などを経て、小説という創造的テキストで作家スタンダールは、ヒロインたちの生き方や資質に、かつてポーリーヌに求めたものを反映させることになる。



長篇小説では『赤と黒』『パルムの僧院』が代表作だが、いずれも主人公を慕うヒロイン2人が、スタンダールの理想とする女性の二つのタイプを象徴することはよく知られている。一人は情熱的でもう一人は頭腦的、古典的な人と現代的な人、母性的な人と男まさり、高貴さと通俗性、など対照的な性格が充てられる。『赤と黒』においては、おおよそ後者にあたるマチルド・ド・ラ・モールが、教養豊かで自立心と自尊心が強く、主人公ジュリアンはその知性や、貴族社会に安住しない独自の考え方をする女性として彼女に注意を引かれることになる。父親の図書室からこっそりと哲学書を持ち出しては読んでいること、社交界では言い寄る貴族青年たちをやり込めること、また真夜中にジュリアンを自室に招き入れるにあたって、梯子をかけて窓から入るよにとのロマネスクな手段をとらせることなどが、彼の魂を揺さぶるのである。マチルドはまた16世紀のマルグリット・ド・ナヴァールに自らを重ねて、ラ・モール家の祖先であったその恋人ボニファス・ド・ラ・モールが愛と友情から打ち首になったという命日には喪服を着つづけている。マルグリットが恋人の首を抱えてモンマルトルの丘麓の礼拝堂へ運び埋葬したという逸話に、真の高貴な魂と情熱を見て共感を覚えていたのである。そしてマチルド自身、ジュリアンが死刑となったのちに、いにしへの歴史を繰り返すことになる。スタンダールが小説の最後にこの逸話を添えたのは、マチルドの特異な性格を際立たせるためとは言え、深い感動とある程度の共感をもってのことだったと思われる。引用しておこう。

彼女はひざまづいた。ボニファス・ド・ラ・モールとナヴァール女王マルグリットの記憶が、きっと彼女に人間以上の勇気をあたえたのであろう。そのふるえる手が外套を開けた。フーケは目をそらした。

マチルドが部屋のなかをあわただしく歩く音が聞こえた。彼女は幾本かのろうそくをともした。フーケが思いきってそのほうを見ると、彼女は大理石の小卓の上に、自分の正面に、ジュリアンの首をおいて、その額にくちづけをしている……。

マチルドは、恋人が自ら選んだ墓地までついて行った。柩が多くの僧侶にまも

られて進むあいだ、人しれず彼女は黒布でおおわれた車にひとり乗って、自分があればほどまでにいとしんだ男の首を膝に抱いてはこんだ。(スタンダール／桑原・生島訳 1830=1977 : pp. 556 - 557)

一方、一見対照的な性格と思われるもう一人の恋人レナール夫人だが、修道女の伝統的な教育を受け、敬虔で純真で「天使のような朗らかさ」を備えている。最終的にジュリアンが牢獄の中で真の愛を見いだすのも彼女によってである。しかしレナール夫人のジュリアンに対する愛そのものが社会的規範を逸脱するものであり、夫の疑いと怒りという窮地から、道徳に背いてジュリアンを救う。強制されてとはいえ偽の手紙をしたためて狙撃事件の原因を作ったのも、本心では嫉妬にかられてのことでもあった。スタンダールは、夫に従順な母性的な優しさ以上に、彼女の情熱愛をこそ書きたかったのだと思われる。結末で死をもってジュリアンと永遠に結ばれるのはやはりレナール夫人なのである。

マチルドのはからいで、この荒れはてた洞窟もイタリアで高い費用をかけて彫らせた大理石によって飾られた。

レナール夫人は約束を忠実にまもった。すすんで自分の命を縮めようなどとはけっしてしなかった。けれども、ジュリアンの死後三日目に、夫人は自分の子供たちを抱きながらこの世を去った。(スタンダール 1830=1977 : p. 557)

『パルムの僧院』では、知性と行動力と男性的な性格、自由を身にまわっているのが主人公ファブリスの伯母であるサンセヴェリーナ公爵夫人(ジーナ)である。愛と嫉妬による心理的葛藤を抱えながら、ファブリスの危機を救うためのパルム公との駆け引き、牢獄からのファブリス救出作戦、光の暗号による通信を行うなど、「新しい女性」あるいはフランスにはなくなった情熱の国イタリアの女性として、その存在感は大きい。それに対して、敬虔で純真にファブリスを愛するのがクレリアだが、やがて牢獄を管理する父に背き、理性に反しても彼を救おうとする。貴族と結婚したのちも、一途にその愛を貫く。ふだん控えめなクレリアが、ファブリ

ス暗殺の危機に際して独房に駆けつけ、毒入りと思われる食べ物を凄まじい勢いで取り上げるのは、彼女の愛の強さを示す印象的な場面である。

彼女は室内に勢いはげしくとびこみ、着物をひきさいたまま、扉をしめた。老番人があとを追って入ろうと扉をおすのを、彼女は手の近くにあった挿し錠をかけてしまった。室内を見まわすと、ファブリスは食事をのせた小さな机の前にすわっていた。クレリアは机に駆けよってそれをひっくりかえした。そしてファブリスの腕をつかんで言った。「あんた食べた？」

このなれなれしい言い方はファブリスを驚喜させた。あまりの興奮にクレリアははじめて女のつつしみを忘れ、恋のありのままのすがたを見せたのだ。

ファブリスはこの危険な食事をはじめようとしていたところだ。彼は娘を両腕に抱いて、接吻の雨をふらした。(スタンダール／生島訳 1839=1977：p. 430)

スタンダールは知性や機知、自由や強さとともに、伝統や規範を越えた純真な愛による行動をもヒロインたちに託し、それを明らかに賛美しているのである。

その他の小説にも同様のスタンスが見られる。処女小説『アルマンズ』にも、未完だが『リュシアン・ルーヴェン』にも二タイプの女性がいる。最後の未完小説『ラミエル』ではヒロインのラミエル自身がその精神や行動力において男性と全く同等、むしろ一体化して見える。ここではスタンダールのいわば分身でありまた同時に女性としての魅力も備えた、究極の理想型が実現されようとしたのではないだろうか。短編小説にも目を向ければ、「男性化した」ヒロインということでは、例えばミーナ・ド・ヴァンゲルには恋ゆえの扮装として男装をさせているし、ヴァニナ・ヴァニニは社会や政治を相手どって、激しい愛で生命を賭ける。「イタリア年代記」各篇の主人公はほとんどが女性だが、信念と愛で皆驚くべき行動力を示す。父親殺しのベアトリーチェ・チェンチ、宗教界を揺るがす修道女たちの愛の闘い……。

創造的テキストにおいては、以上のように女性たちは自由と真正さにより運命を開き自己実現をする。しかし注意したいのは、結末はほぼ例外な

く「死」「悲劇」に向かうということである。ある意味ではそれこそがロマネスクな感動を呼び芸術作品としての魅力になってはいるのだが、要するに当時の社会にあっては、彼女たちの行動はすべて「規範」「制約」「常識」によって罰せられ、死をもって購うしかないものだったということになる。「自由で幸福な女性は、1830年のフランス社会の“規範”によって、死ぬか消えるしかない<sup>9)</sup>」のである。レナール夫人、クレリア、ベアトリーチェ・チェンチたちの運命には、はじめから「死」が刻み込まれていたのである。うがった見かたをすれば、そこにはスタンダールにとって究極の理想としての「死んだ母」のイメージの投影もあるかもしれない。

まさにリサ・アルガツィ Lisa Algaziも言うように「若き日のベールがポーリーヌに保守的な忠告をしたのは、避け得ない社会の糾弾から妹を守るためだったのだ（……）人生は小説ではあり得ないのだから、ポーリーヌは小説のヒロインたちのように生きることはできない<sup>10)</sup>」。作家も、また若き日のアンリもすでに、ロマネスクな理想と現実の女性の生き方の違いをはっきりと認識していたと言える。

スタンダール自身、時代の制約に捕らわれていたことも指摘しておこう。つまり生涯を通してかなり一貫していた女性観や女子教育論も、貴族や上流ブルジョワ階級の女性をほぼ対象としていたことである。また男性と同等の教養を求めつつ、結婚制度は否定しないで、愛と知性を夫や家庭のために生かすことを求める。また教育は奨励するが、仕事を持つことははっきりと否定する。女の作家や学者などには、よほど必要に迫られるか特殊なケース（ジョルジュ・サンドなど）でないかぎり、嫌悪感さえ抱いているのである。

## 5 スタンダールの女子教育論を現在から見ると…

スタンダールの女性観、女子教育論は、近年になってもフェミニズムの観点から注目され、検討や批判が続いているようである。最後にそのいくつかを紹介し、改めてスタンダールの先駆性、現代性と、問題点や限界を確認しておきたい。

まず、精神分析家であり文学批評でも名高いジュリア・クリステヴァ Julia Kristevaの著作『愛の物語』(1983)において「スタンダールとまなごしの政治学 —あるエゴチストの愛—」<sup>11)</sup> という一章がある。スタンダールにおいては(とくに『赤と黒』『パルムの僧院』に顕著だが)政治と愛が密接に結びつき、二つの闘いがともに進行するという主張が基調となる。その中で、ボーヴォワールによるスタンダール=フェミニスト説を真っ向から批判している。「スタンダールはおそらく当時としてはまだきわめて稀な自由精神を持っていた。が、このような〈フェミニズム〉は女性の理想像に支えられているに過ぎない(……)」<sup>12)</sup> というものである。つまり小説という想像でのみそれは可能であり有効なのである、と。しかもスタンダールの好んだ女性は「古いカトリック信者で、中世的価値にとらわれた貴族や、非合理的なイタリア人」であり、また女性たちは権威主義的、母性的、全能で、いわば「革命後の神なき時代にあって、無神論者スタンダールの崇拜の対象なのだ」と指摘する<sup>13)</sup>。要するに、男性本意の、男性に都合いい女性にすぎないのだという。

また、スタンダールとバルザックのフェミニズムを比較しつつ詳しく論じたりチャード・ボルスター Richard Bolsterの著作『スタンダール、バルザックとロマン派のフェミニズム』(1970)もおさえておこう。この中では例えば「彼が妹ポーリーヌに送った初期の手紙はすでにはっきりとフェミニスト的な発想を示している。」「妹の精神形成を願い未来の作家は、善き心と優れた知性はもちろん、多くの男性よりももっと論理的な思考ができるように数学の勉強を勧め」、また強く勇気ある毅然としたどんな逆境にも屈しない魂を持つ女性を模範とすることも勧めていると言う<sup>14)</sup>。革命期のロラン夫人などがそのようなスタンダール好みの女性であった。

ボーヴォワールやクリステヴァらの批評を踏まえて近年でも、スタンダールの女性観や、また以前にはほとんど言及のなかった妹ポーリーヌへの注目が目立つようになっている。エレン・コンスタンス Ellen Constansの論文「幸福の名において —スタンダールのフェミニズム—」(1983)では、フランスのロマン主義時代、正確には七月王政の始まる1830年ころから前述のように女性教育や女性の権利に関する議論が活発になったとされ

ることを受けて、スタンダールが早くも1822年つまり『恋愛論』ですでに同じ観点からそれらの議論を行っていたとする<sup>15)</sup>。また女性の求めるべき条件もほぼ同じ観点から考えていたことを重視する。教育、結婚（自由選択、離婚の許可）、経済的自立、市民的・政治的平等の4つである。リサ・アルガツィは「フェミニスト スタンダール？」<sup>16)</sup>（2005）でクリステヴァのスタンダール批判をさらに反駁しようとする。クリステヴァは20世紀後半の、女性も参政権を持つ時代のフェミニズム議論に捕らわれすぎており、スタンダールの女性観の先駆性を過小評価していると言う。時代の文脈に置いてスタンダールのフェミニズムの意味を考えるべきだという主張である。リュシー・ガルニエ Lucy Garnier は「人は女に生まれるのではない、女になるのだ —ポーリーヌへの手紙と女性の条件—」（2007）で、タイトルのとおり、改めてポーヴォワールによる評価を見直すとともに、ポーリーヌがスタンダールの思想形成に果たした役割の大きさや、本稿でも指摘したその「虚構性」も確認している。「女性の状況に関する考察が生まれたのは、結局ポーリーヌからではなくポーリーヌへの手紙においてである。」「このような妹の〈虚構化〉において、女性論が生まれ、ベールはポーリーヌ抜きでの対話でそれを追求したのだ。〈おまえを教育する〉は〈おれ自身を教育する〉ことだ」<sup>17)</sup>と言う。そしておそらくポーヴォワールに重ねてこう表現する。「ポーリーヌはアンリと同等に生まれたのではない、手紙の中で同等になったのだ。<sup>18)</sup>」またその女子教育論の新しさや、生物的条件によってステレオタイプ化された伝統的女性のイメージを越えていることを強調する。ただしスタンダールが現実には時代の社会的制約を明確に認識していたことも同時に指摘している。

現在、改めてスタンダールの女性観や女子教育論が『恋愛論』はじめ諸テキストを通して検討し直されている<sup>19)</sup>。それだけ彼の考え方が、現代的な感覚からも理解し易く正面から取り組むことのできるものだという事ではないか。スタンダールの書簡や、それを通して従来「愚鈍な」「兄の期待はずれの」と切り捨てられがちだった妹ポーリーヌも、新たに重要な研究対象となりつつある。1822年でもなくさらに遡って1800年ころから

手紙の中で基本思想ができてきたという意味においてもそれは興味深い。19世紀半ばから議論が活発になり、やがて中央集権的な共和国教育政策の充実がはかられていく（ただし対象はもうしばらく男子に限られ続けるが）フランスにおいて、改めてスタンダールによる妹への教育とその思想を当時の社会的現実の中で見ておくのは意義のあることだと考える。

### 【註】

- 1) Simone de Beauvoir ; *Le Deuxième sexe*, Gallimard, 1949. (ボーヴォワール／生島遼一訳『第二の性』「V文学に現れた女性」新潮文庫、新潮社、1959年) 本文中の引用では生島訳の新潮文庫版の文章を使用させていただく。
- 2) Stendhal ; *De l'Amour*, 1822. (スタンダール／大岡昇平訳『恋愛論』新潮文庫、新潮社、1970年)
- 3) Cf. Lisa Algazi ; « Stendhal féministe? », in *L'Année Stendhalienne* 4, 2005, p. 31.
- 4) Françoise Mayeur ; *L'Éducation des filles en France au XIXe siècle*, Perrin, 2008 (Hachette, 1979), p. 7.
- 5) Cf. *Ibid.*, p. 26, p. 91.
- 6) *Correspondance générale*, 6 vol. Etablissement des textes et préface par V. Del Litto, en collaboration avec Elaine Williamson et Jacques Houbert, Champion, 1997-1999.
- 7) アンリとポーリーヌの手紙からの引用については、拙著における翻訳を使用する。岩本和子『スタンダールと妹ポーリーヌ』青山社、2008年。
- 8) 本名はFrançoise-Pierrette de Bourcet de La Saigne (1761-1814)。革命期の平等思想を尊重し、単にラセーニュ嬢と呼ばれた。王室付地理学者ピエール・ド・ブールセ (1700-1780) の姪。
- 9) Ellen Constans ; « Stendhal et les problèmes de la condition féminine dans l'œuvre de Stendhal », thèse de doctorat, Université de Paris-IV (15 mai 1976), p. 73.
- 10) Lisa Algazi ; « Stendhal féministe? », *op. cit.*, p. 39.
- 11) Julia Kristeva ; « Stendhal et la politique du regard —l'amour d'un égotiste— » in *Histoires d'amour*, <L'Infini>, Danoël, 1983.
- 12) *Ibid.*, p.338.
- 13) *Ibid.*, p.339.
- 14) Richard Bolster ; *Stendhal, Balzac et féminisme romantique*, Minard, 1970, p. 81.
- 15) Ellen Constans ; « Au nom du bonheur —Les féminismes de Stendhal— »,

in *Europe* (revue) : *Stendhal*, 1983, p. 62.

- 16) Lisa Algazi ; « Stendhal féministe? », *op. cit.*
- 17) Lucy Garnier ; « “On ne naît pas femme, on le devient” —Les lettres à Pauline et la condition féminine— », in *Lire la correspondance de Stendhal*, textes édités et présentés par Martine Reid et Elaine Williamson, Honoré Champion, 2007, p. 12 et p. 17.
- 18) *Ibid.*, p. 22.
- 19) 今回の「女性学コロキウム」における発表と本稿執筆時にはまだ手に入らず参照できなかったが、スタンダールの学術専門雑誌『スタンダール年報』*L'Année Stendhalienne* の最新号（8号）では「スタンダールと女性」特集が生まれ、その中の論文で、例えばクリステヴァ批判なども展開されているらしい。

#### 【参考文献】

- Stendhal. 1822, *De l'Amour*. (スタンダール／大岡昇平訳 1970 『恋愛論』新潮文庫、新潮社。)
- 1830, *Le Rouge et le noir*. (スタンダール／桑原武夫・生島遼一訳 1977 『赤と黒』(スタンダール全集1) 人文書院。)
- 1839, *La Chartreuse de Parme*. (スタンダール／生島遼一訳 1977 『パルムの僧院』(スタンダール全集2) 人文書院。)
- 1997-1999, *Correspondance générale*, 6 vol. Etablissement des textes et préface par V. Del Litto, en collaboration avec Elaine Williamson et Jacques Houbert, Champion.
- 岩本和子 2008 『スタンダールと妹ポーリース』 青山社。

- Algazi, Lisa. 2005, « Stendhal féministe? », *L'Année Stendhalienne*, 4 : 29-40.
- Beauvoir, Simone de. 1949, *Le Deuxième sexe*. Gallimard. (ボーヴォワール／生島遼一訳 1959 『第二の性』「V文学に現れた女性」新潮文庫、新潮社。)
- Bolster, Richard. 1970, *Stendhal, Balzac et féminisme romantique*. Minard.
- Constans, Ellen. (15 mai 1976), « Stendhal et les problèmes de la condition féminine dans l'œuvre de Stendhal », thèse de doctorat, Université de Paris-IV.
- 1983, « Au nom du bonheur —Les féminismes de Stendhal— », *Europe* (revue): *Stendhal*.
- Garnier, Lucy. 2007, « “On ne naît pas femme, on le devient” —Les lettres à Pauline et la condition féminine— », *Lire la correspondance de Stendhal*,



textes édités et présentés par Martine Reid et Elaine Williamson, Honoré Champion.

Kristeva, Julia. 1983, « Stendhal et la politique du regard —l'amour d'un égotiste— », *Histoires d'amour*, <L'Infini>, Danoël.

Mayeur, Françoise. 2008, *L'Éducation des filles en France au XIXe siècle*, Perrin (Hachette, 1979).